

参考2. 卑弥呼 邪馬台国の候補地 吉野ヶ里に匹敵する四国讃岐の大集落 2013.1.27.
日本各地の人が交流した大都市集落 善通寺市「旧練兵場遺跡」を訪ねる

香川県埋蔵文化財センター考古学講座12「瀬戸内をゆきかう人々」2011.7. より
<http://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/kankobutsu/koukogakukouza12.pdf>



瀬戸内を行き交う人々

香川県埋蔵文化財センター 考古学講座 12
2011年7月3日 蔵本 晋司

約2,000年前の弥生時代後期、倭人社会は大移動の時代を迎えていました。それに伴い、多くのモノが持ち運ばれ、遺跡に残されました。まもなく、前方後円墳という特異な形の墓が、列島の大半の地域に造られるようになります。おそらく、こうした弥生時代の人々の広域的な交流を背景として、古墳は成立したものと考えられます。

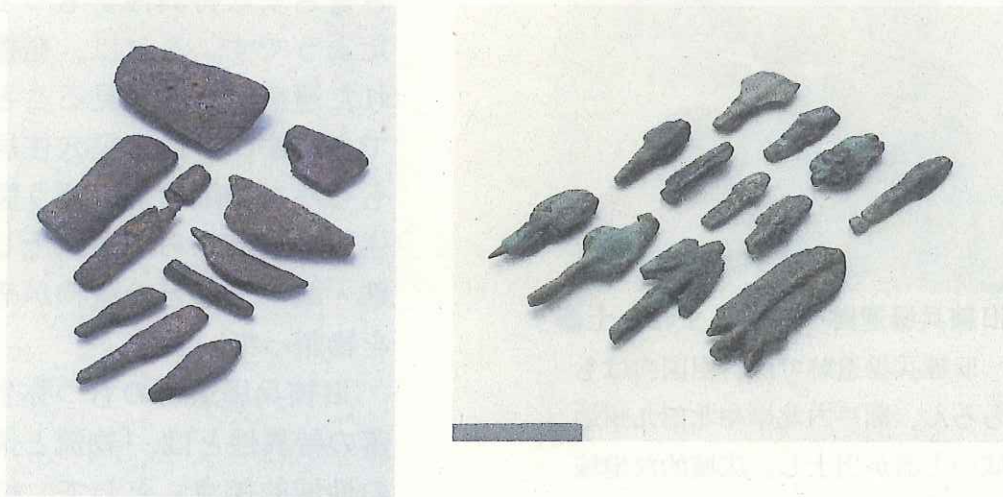
本講座では、古墳の成立への歩みを、古墳そのものではなく、弥生社会のなかから、人々の交流・交易をキーワードに、考えてみたいと思います。

1. 人は動く

倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使訳通ずるところ三十國。

『三国志』魏書東夷伝倭人条

鉄・銅・石・玉・朱・塩…を求めて



旧練兵場遺跡より出土した鉄製品（左）と銅鏃（右）

こうした金属製品の原料は、中国や朝鮮半島から製品などとして遺跡に持ち込まれたようだ。それを遺跡内で、再加工などして、別の製品に作りかえられることもあった。

2. 旧練兵場遺跡

旧練兵場遺跡は、国立善通寺病院敷地を中心に、東西1km、南北500m程度の範囲に広がる集落遺跡です。弥生時代の中頃（約2,100年前）に集落が営まれはじめ、室町時代まで継続した遺跡であることが、これまでの発掘調査で明らかとなりました。とくに弥生時代後期（約1,900～1,800年前）には、多数の竪穴住居が発掘され、香川県下でも最大規模の集落遺跡であることが明らかになりました。



旧練兵場遺跡よりみつかった鍛冶炉のある竪穴住居

中央の黒く見えるところが鍛冶炉。遺跡内で鉄製品の加工がなされたことが実証された。



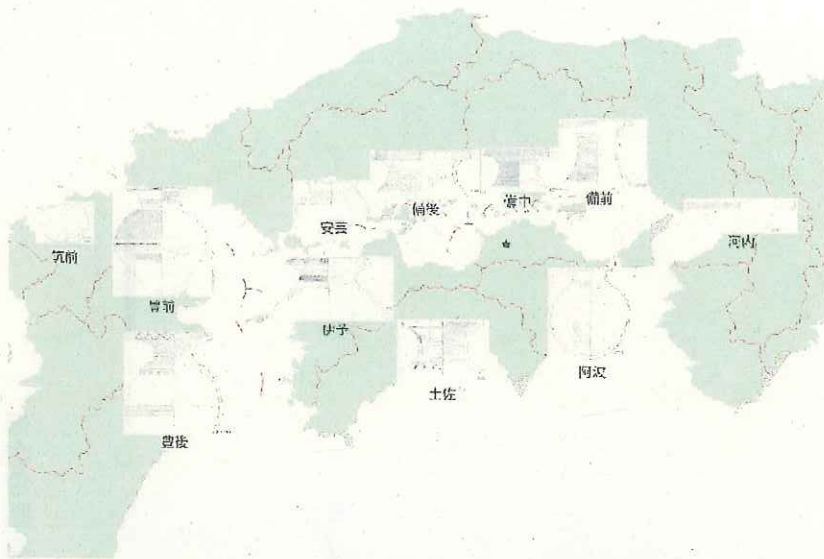
旧練兵場遺跡へ持ち込まれた土器

旧練兵場遺跡では、四国内はもちろん、瀬戸内北岸や北部九州地域の土器が出土し、広域的な地域と交流・交易がおこなわれていたことがわかりました。

その特異性とは何か？

旧練兵場遺跡は、単に集落の規模が大きいというだけではなく、他の集落にはない、さまざまな特異性をもっていたようです。それは、発掘された遺構や遺物に見ることができます。多数の竪穴住居はもちろん、鍛冶炉を伴う竪穴住居や遺跡から多数出土した鉄・銅・玉などの遺物がそれを物語っています。

旧練兵場遺跡のもつ弥生集落の特異性とは、「物流と情報の地域的拠点」として、位置付けることができるものだと考えられます。



旧練兵場遺跡より出土した各地の土器

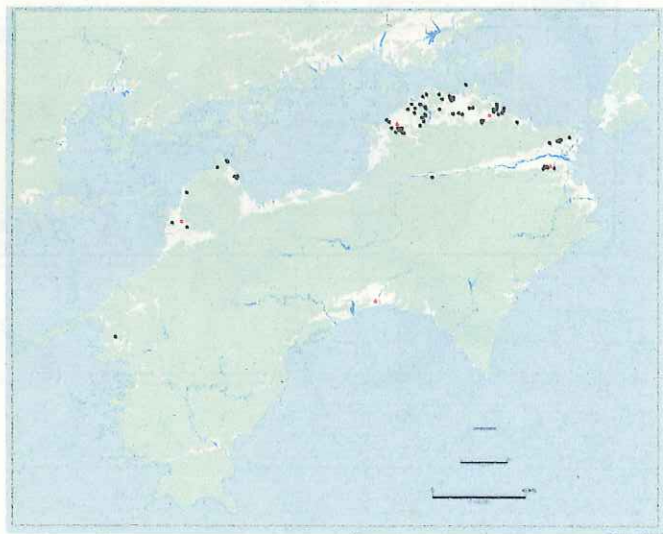
旧練兵場遺跡からは、主に瀬戸内沿岸部地域の土器が大量に出土している。旧練兵場遺跡の人々は、瀬戸内海を舞台とした、南北・東西の交流の一端に連なっていたのであろう。

3. 古墳出現へむけて

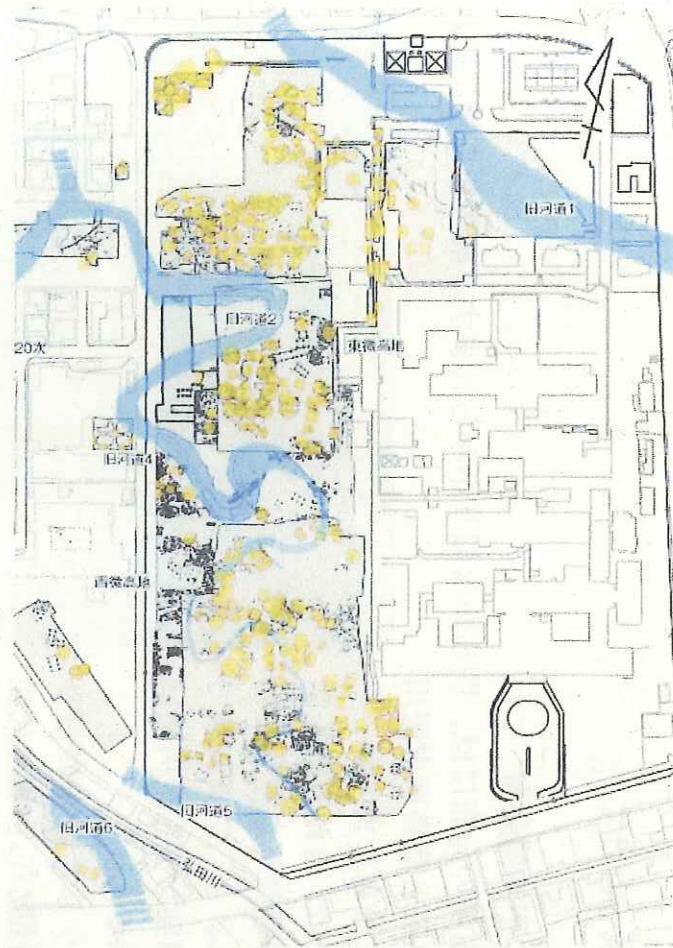
前方後円墳の不均等分布

四国の前期古墳の分布には、明らかな偏りがみられます。前方後円墳に限れば、香川県の東部と徳島県吉野川下流域に濃密に分布しますが、それ以外の地域では、今治平野を除いて、1～3基程度が点在しているに過ぎません。とくに高知県では、現在まで確実な前方後円墳は確認されていません。

おそらくこうした分布の偏りは、弥生時代後期から古墳時代前期初めにかけての集落遺跡の動向と、密接にかかわりをもっていた可能性が考えられます。



四国の前期前方後円墳と拠点集落の分布



旧練兵場遺跡（左）と川津中塚遺跡（右）の弥生時代の竪穴住居の分布

遺跡の継続期間が異なるため直接比較することはできないが、両遺跡では明瞭に竪穴住居の分布の違いが認められ、居住人口の多寡を反映している可能性が考えられる。また、こうした遺跡の継続期間の長短も、拠点的性格をもった遺跡の特徴でもある。